

## 異文化と生きること：

### コミュニケーションという可能性

国際学部 山脇 千賀子



1999年4月より国際学部教員。大学時代スペイン語学科でペルーの食文化に興味をもつ。修士課程では地域研究研究科（ラテンアメリカ・コース）でペルーにおける日系人の食生活について論文執筆。その間、ペルーに約2年間留学兼調査のため滞在。博士課程では社会学専攻。ペルーにおける近代化のなかの中国系・日系住民を中心にした研究をすすめる。

(やまわき・ちかこ)

国際学部の準必修科目となっている「国際コミュニケーション論」を担当している教員として、私が実践している授業方針および方法を紹介します。「国際学」という学際的分野では、既存の学問体系に依存するのではなく、たえず新しい社会的情勢に対応しながら、われわれはどのように社会や人間を理解することができるのか・よりよい世界をつくっていくことができるのかを考えています。

#### 1. 私にとっての授業とは何か

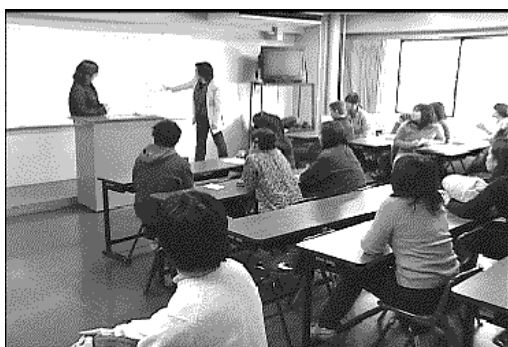
私にとっての授業は、あくまでも学生との共同「作品」です。私は学生に考えて欲しいテーマに関連する「素材」を提供し、考えるためのある種の「テクニック」を伝授する役割を果たしています。

しかし、その他の面からいえば、私も学生とともに考えるひとりの人間です。私が提供した「素材」について、学生ひとりひとりがどんな考え方をもっているのかを知りたいという気持ちを持続できなければ、私の授業は成り立ちません。

また、もう一方の「主役」である学生の反応がなければ私の授業は成り立ちません。学生の反応を受け取るためには、私の提供する「素材」が学生の知的関心を引き起こすようなものでなければなりません。

このように、授業を学生との相互作用の場として成り立たせるための具体的な工夫については後述しますが、授業という場は、私にとってあくまでも学生とのコミュニケーションの場と捉えていることを強調したいと思います。

学生がどのような反応をしてくれるのかによって私の授業は大きく左右されます。それは、伝統的な学問体系をもった分野の授業においては、「あつてはいけないこと」かもしれません。確固とした学問体系の基礎を積み上げて、その分野の専門家を養成するためには、教える側には確固とした「教えるべきこと」があり、それが簡単に変化するようなものであつては意味がないことになるでしょう。誤解されないためにいうなら、私の授業にも確固とした伝えるべきことがあります。しかし、伝えたいことを学生の「身」にしてもらうためには、まず学生がどんなことに興味をもっている人間かを知り、彼らがもっている可能性を伸ばす方向性をみきわめることが大事ではないでしょうか。相手によってわれわれがとるべきコミュニケーション・スタイルが変化するのは当然です。こうした様々な意味で、授業はコミュニケーションなのです。



## 2. 授業の実践（1）

既述の「国際コミュニケーション論」（新カリキュラムでは1年次秋学期）受講生は約250～350名で、国際学部でも特にクラスサイズの大きい授業のひとつ。最初の授業では、シラバスに記載している授業目的や、ここで書いている「私の授業観」を含めた私が目指している授業の方向性を、学生に理解してもらえよう説明して、問題意識を共有することをめざします。

ただし、クラスサイズの制約で、私のモットーとしている「コミュニケーションとしての授業」を行なうことが大変困難な条件にあるので、現在までのところ学生とのやりとりは「時差」のある間接的なコミュニケーションが主とならざるをえません。

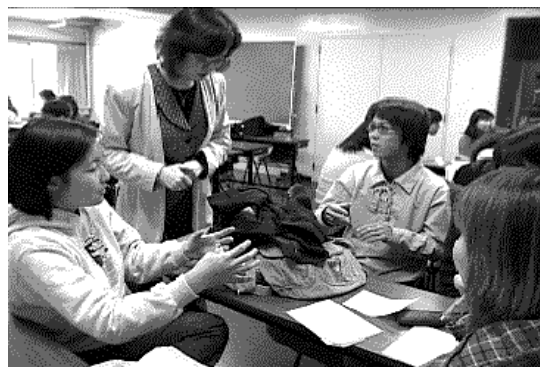
具体的に行なっているのは、毎回授業の最後に5～10分程度の時間をとり、B6版の用紙に授業で扱ったテーマについて各自が考えたこと・感じたことを書いて提出してもらうことです。これをコメント・カードと私は呼んでいます。コメント・カードは単なる出席カードではなく、私が授業という場で発しているメッセージに対する学生の皆さんからの反応を知るための手段と位置づけます。

私のメッセージに対する学生のメッセージには様々なものがあります。時には私が授業では取り上げることができなかつたけれども関連する重要な視点を提示してくれるメッセージもあります。私のメッセージとは全く違う方向性をもったメッセージをぶつけてくる学生もいます。反対に私のメッセージへの共感を示すものもあります。

これまでの印象からいえば、文教大学の学生は口頭で思ったことを説明する能力よりも、書くことによって自己表現する能力の方が高いようです。おそらく、日本の高校までの教育において口頭発表能力を高める訓練を受ける機会が著しく限られていることと関連しているのでしょう。書くことによってコミュニケーションをとるという手段は、私にとって強いられた面があったのですが、大学生になりたての日本の若者たちとのコミュニケーションには有効な手段といえるかもしれません。

コメント・カードには、毎回授業直後すべてに眼をとおして、次回の授業の参考資料とします。学生に誤解を生じさせるような事項があることが分かった場合や授業を発展させるために有益なコメントがあった場合など、すぐ次の授業で対応することができます。学生は仲間のコメントが授業に取り入れられていることを知ると、自分達も授業に参加しているという意識が高まるようです。私にとっても、学生が参加してくれることが、より魅力的な授業づくりをしていくための励みになります。

このような授業づくりへの貢献度によって、コメント・カードは成績評価の対象になります。最終的な成績評価の40%をコメント・カードの評価が占めます。残りは、各30%をレポートと期末筆記試験が占めることにしています。ただし、今後はコメント・カードが占める割合を増やすことを検討中です。



### 3. 授業の実践（2）

クラスサイズが30～40名程度までなら、学生と直接口頭でのコミュニケーションをとる機会をもつことができます。1999年度担当の「特殊講義：異文化間コミュニケーション論」は、幸いこの範囲の受講生数となり、「学生とともにつくる授業」にするための条件が整いました。

「異文化間コミュニケーション」について国際学部で学ぶ意義については、学生もおおよそ心得てはいます。異なる文化的バックグラウンドをもった人々とのようにつきあうことが、破壊的コンフリクトに至らずに互いに学びあい・高めあうような関係につながるのか、といったテーマは国際学部を受験することを決める過程で学生が必ず一度は考えたことがあるはずだ、といってよいかもしれません。

しかし、われわれに必要なのは考えることだけではありません。われわれは、よりよい異文化間コミュニケーションをすることを目指しているはずで、そして、多くの場合、考えられる望ましい異文化間コミュニケーションを実際の行動面で実現することは、頭のなかだけで考えるほど容易ではありません。異文化とともに生きることが、われわれにもたらすのはどういう事態なのかを、身体を使って理解することが、この授業の目標の一つです。

授業の一例を挙げましょう。まず、世界各地の異なる音楽のCDを6つくらい用意します。例えば、キューバの黒人系住民が祭りで奏でる音楽、メキシコ高地の先住民によるカトリック教会の祝日の歌、アルジェリアの人気歌謡歌手の歌、台湾の先住民族による収穫を祝う歌、アイルランドのケルト系楽団による演奏、インドネシア・バリ島のガムラン（打楽器演奏）など、日本の大学生にあまりなじみのない音楽を中心にします。それぞれの音楽を一曲聴いてもらい、一曲ごとに次の質問事項に答えるという作業を行ないます。



①この音楽を聴いてイメージしたことを自由に記述してください。②この音楽が好きですか。5段階評価で答えてください。③この音楽に親しみがわきますか。5段階評価で答えてください。④この音楽をどの程度の頻度で聴きたいですか。5段階評価で、毎日聴きたい～できるなら聴きたくない、までの選択肢から選んでください。

一連の作業が終わった後、それぞれの結果を学生たちとともにまとめてみます。また、自分たちが各音楽についてどのように感じたか、4名程度のグループでディスカッションを行ないます。この過程で、学生たちがある種の音楽によって喚起されたイメージと日常生活のなかで培っている民族性などに関するステレオタイプをどのように対応させているのかを自覚することができます。また、お互いのイメージやステレオタイプの違いを実感することで、個人レベルでの「異文化」に触れることができます。

次の段階には、ディスカッションにある程度のまとまりをつけ、この体験から学んだ「異文化間コミュニケーション」に関する諸問題をグループごとに発表してもらいます。この授業では、普段あまり聴き慣れていない音楽に対する違和感を自覚し、異文化に接したときにわたしたちはどのように感じるものなのか、「疑似体験」したことになります。学生たちは、自分にとって心地よいとは限らない音楽が、いやでも毎日毎日耳に入ってくる状態を想像します。この違和感に包まれながら生活することが異文化間コミュニケーションなのだということを、身をもって実感するので、また、自分が感じた違和感をクラスの仲

間すべてが共有しているわけではないこともディスカッションを通じて実感するのです。

「伝統的」授業では、これまでの異文化間コミュニケーションに関する研究によって分かっている様々な概念について説明するだけの授業になり、学生の「頭」に訴えかけるだけになってしまいますが、私の方法では学生が「身体」をもって学ぶことを補助しているのです。ここでいう「身体」は、自分の身体だけではなく、クラスに参加する皆の身体を含み込んだ「場」でもあります。

以上の流れのなかで、教員である私の役割は、あくまでも学生の学ぶ過程を補助することです。ディスカッションが方向性を見失った場合などに適度な「介入」を行ったり、感覚を言語化できずにいる学生の手助けをしたりします。また、私にとっての授業は、学生の場合と同じく、クラスに参加している他の学生が同じ状況でどのような反応を示すのかを知る絶好の機会になります。もちろん、授業に臨んで私はあらかじめ学生の反応をある

程度は予想をし、クラスの進行に関する見通しをもっています。しかし、時に学生は予想をよくもわるくも裏切ってしまう場合があります。それが私にとっての授業の醍醐味でもあります。

#### 4. おわりに

私が以上述べてきたような授業に対するスタンスおよび方法をとっている背景には、私が大学・大学院教育を通して受けてきた文化人類学的・社会学的アカデミック・トレーニングの成果があるのかもしれませんが。自らが属する文化・社会をまるで「他者」のように距離をとって観察する視点を持ち、たえず文化・社会を生成・変転し続けるものとして観察する姿勢をもつこと。そして、それを「楽しむこと」。

それだけに私の授業のやり方にはそぐわない種類の分野があるだろうと思うことを付け加えておきます。